

方言

並木 せつ子

若いころは関心の薄かった方言に、歳を重ねて心ひかれるようになった。きっかけはいろいろあるが、一番は石牟礼道子の作品だったのではないかと思う。「ほうお、こりや美しか嬰兒(やや)さまじゃ」(『食べごしらえおままごと』)「うつくしか畠になったぞねえ」(『樺の海の記』)、「・・・曾(ひい)ばばさまはお達者かえ」「いんえ、去年の秋に、仏さまになられ申した」(『花びら供養』)など、石牟礼道子の筆力はあるにしても、熊本弁の美しさにすっかり陶醉してしまったのである。

その土地で育った人が、その土地の方言で話す昔話を聞いたことも一因かもしれない。私が聞いたのは、京都弁、新潟(十日町)弁、沖縄弁の昔話だったが、文章で読んだのとは違う、耳で聞かからこそ心地よいリズム、おかしみの出方がひと味もふた味も濃く感じられた。こうして、私の“方言心酔度”は徐々に高まってきたようだ。

子どもの本の担当だった頃、秋田弁の『八郎』(斎藤隆介)、土佐弁の『だいふくもち』(田島征三)など方言で書かれたものや、木下順二の「たぬきと山伏」、「・・・だったと」や「・・・そうな」などの方言風の言葉が入った昔話を語ったことはあるが、方言の心地よさを感じることはできなかつたし、聞き手の子どもたちにも伝わらなかつたはず。この体験は方言開眼には至らなかつたのである。

昔話以外にも、方言の絵本は増えているような気がする。長崎弁の『だいちゃんとうみ』(太田大八)、土佐弁の『にちよういち』(西村繁男)、大阪弁の『夏平くん』(あおきひろえ)など、目で文章を追っているときはおもしろいのだが、声に出して読むのは難しい。『ぼちぼちいこか』(今江祥智訳)の大阪弁など、ど

う読んだらよいのか戸惑ったものである。

それにしても、絵本などに使われる方言は西日本や東北が多く、関東方言の本をあまり見かけないのはなぜだろう。それぞれの地域で発行されているものはあるだろうが、全国に流布しているものは少ないように思う。私の住む埼玉県にも方言はあるのだが、埼玉方言といわれて「ああ」と思い浮かぶ人は少ないだろう。大きな特徴があるわけでもなく、埼玉弁の本やドラマなど滅多にない。住んでいる人も他県出身者が多く、今や埼玉弁をしゃべる人は圧倒的に少ないのだから、耳にする機会がないのは当然である。

小さいころから聞いて育ってきた私も、実際にしゃべることはできない。それでも、旅先の電車で、向こうの方のグループから「埼玉弁」の会話が聞こえてくると懐かしい気持ちになったものだ。ちょっとした言葉づかいや、アクセントやイントネーションの違いを、私の耳はちゃんと聞き分けられたのである。農村生まれの母が、ずっと埼玉弁を使っていたので、私の耳は家で養われたのだろう。石井桃子のお母さんは浦和近在の人で、「生まれ故郷のことばまるだし」(「小さな丸まげ」)だったというから、憶測にすぎないが、母と同じような言葉を使っていたのではないかと思う。『幼ものがたり』には「ケバ(毛)」という埼玉弁が使われている。

他に「おっぺす(押す)」「うっちゃる(捨てる)」「めこい(なめらか)」「なびる(こすりつける)」「こそっばい(きまずい)」などあるが、やはり言葉だけ切り取って紹介しても、方言の心地よさは伝わらない。一つだけ自慢したい埼玉弁が「はま」という言葉。車輪のことだ。汽車でもトラックでも荷車でも、すべて「はま」で事足りるという便利な言葉である——なんと、私は大人になるまで、これが方言だと知らなかつた——。今になってみると、「生まれ故郷のことば」を聞き分けるだけでなく、しゃべれるようになっておきたかと思う。(なみき せつこ)

公立図書館の児童サービスについて～図書館勤務で出会ってきたこと～ 3

昨今、子どもの読書離れが危惧され、子どもの図書館利用も様変わりしてきているようです。また、図書館をとりまく環境も、図書館そのものも変わってきています。2回に亘って掲載した、みずもさんとひろはさんのお話も、今回でひと区切りです。これからの図書館の児童室・児童サービスについて、お二人はどのような思いをお持ちでしょうか。

学校図書館と連携をして

ひろはさん：中央図書館にいた時は、図書館の学校連携事業を進める仕事を担当していました。教育委員会に誕生したばかりの学校図書館担当指導主事と一緒に、ひんぱんに学校に出かけて、ボランティアさんによる朝の読み聞かせ活動を見学した後、ボランティアさんや司書教諭の先生と懇談しました。学校図書館も必ず見学して、どうすれば良くなるだろうかと考えました。学校司書がいなかった頃です。

みずもさん：私も卒業した小学校から、図書室について相談されて棚を見ると、私が子ども時代に読んだその当時の本がそのまま入っていたりしてびっくりすることがありました。新しい本と、背表紙がビニールテープで補修されたような古い本が、一緒にたに棚に並んでいて、全部本が死んでいるんです。新しい本は場所を設けて目につくように並べたらいかがですかって伝えたのですが、「利用が減って…」というご相談でしたが、これでは子どもたちは来ないかもと思いました。

ひろはさん：たくさん学校図書館を見たので、利用される図書館にするにはどうすればいいか、いろいろ勉強させてもらいました。2年目からは、地域図書館の担当司書も同行してもらって、学校図書館を知ってもらうと同時に先生とも顔がつながりました。

みずもさん：地域全体を見ようという図書館ならではですね。

ボランティア講座の運営

ひろはさん：中央図書館では、絵本の読み聞かせとストーリーテリングを講習する、市の「ボランティア養成講座」の運営も担当しました。

各図書館で開講する講座の1回目は外部の先生にお願いし、2～3回目は実習中心で図書館の司書が担当しました。

みずもさん：私の町も、学校でボランティアをされる人たちを対象に読み聞かせ講座を開催していますが、講師役はやはり職員がやっています。最初の5年間は私が、その後の5年は後輩が…と、代々引き継いでいけるように、次世代の職員をいつも参加させています。

ひろはさん：講座では、ボランティアの方の読み聞かせを聞いて講評するのですが、あらかじめ候補の絵本を10タイトル程度決めて、その中から選んでもらいました。信頼できる絵本については講評もしやすく、同じ本を選ぶ人がいて、何度聞いても、やっぱり「面白い」と実感できました。

みずもさん：読み手が変わって、語り口が変わってもね。私たちも、本を選ぶときは、子どもの立場に立って聴いた時にどうかということをまず考えてくださいって受講生に言っています。

やっぱりいい本は何回だって読んであげればいいと思います。子どもたちが「知ってる～」と言っても、読んでもらえば嬉しいんだものね。だから『おおかみと七ひきのこやぎ』なんかも、何回語ったかわからない。最初ばかりにしていた高学年の男の子がだんだん身を乗り出して、一緒に連れてきた弟や妹なんかよりも真剣に聴いていたりするようなこともよくあります。

児童サービスの仕事

ひろはさん：日本図書館協会の児童図書館員養成講座を受講してからは、とにかく本を読みました。「読まないうちは棚に出さない！」という気持ちで、新刊には必ず目を通してきたので

す。大人の本で中を全部読んで選ぶなんてことは、普通ではまずないですよ。子どもの本は、赤ちゃんから中学生までを対象にしている、様々な意味で幅があるので、「本を読む」ことは、児童サービスの重要な仕事だと思います。

みずもさん：小さい子の場合、本を選んで子どもに手渡すのは親なので、親への配慮も必要になりますね。親御さんたちの意識を変えてもらうために、この本は目立たないけれど子どもたちは喜びますよっていうブックレットを作って配ったこともあります。

ひろはさん：そうですね、子どもを取り巻く大人にも働きかけなくてはいけないですよ。

また、目の前の子どものことを考えると同時に、目の前にはいないけれどサービス区域内にいるたくさんの子どものことも気にかけることが大切だと考えています。

児童サービスは、ひとつのことを伝えるのにいろいろな話し方が出来ないとだめだ、と聞いたことがあります。大人に向けてだったら、大体同じ言葉で誰にでも話せますが、子どもの場合はそうはいかないですものね。

みずもさん：そうですね。聞く方も、子どものわかりにくい話を聞いて対応する訓練が出来ていれば、大人相手だって大丈夫。0歳から5歳くらいまでを相手にするには、いろいろ求められますよね。「児童サービスやっていれば、あとは大丈夫よ」って、若い頃にどなたかから言われました。

ひろはさん：今、子どもの利用がどんどん減っていて、児童サービスをやっていると冷たい目を向けてくる人もいます。でもボランティアさんにも大きな声で言っているのですが、子どものうちに図書館の利用の仕方を楽しみながら学んでもらうことは、将来の利用者を育てることになります。

変わりゆく図書館、次の世代に伝えたいこと

みずもさん：県内の図書館も、カウンターは委託職員に任せ、正規職員は事務室で仕事をする

運営体制が多くなってしまっています。利用者の人たちと触れ合うことなく運営していて、金太郎飴みたいな図書館になってしまうのかな。

ひろはさん：利用者の方々も変わってきていると思うんですよ。ネットで予約申し込みをして、受け取りだけして帰ってしまう人とか。子どもの本の予約も、忙しい子どもの代わりに親が取りに来るといことも多いです。

職員の中でも、自動貸出機だけでいいって言う人もいるから、そうすると、予約があった本だけを購入すればいいなんていう極端な考えも出てきてしまう。かつての人と人のつながりは、重要視されなくなりつつあるかな…という心配はありますよね。

みずもさん：子どももカウンターに聞きにこなくなりましたよね。昔は夏休みの自由研究などのためにチラシを作って置いておくと、あつという間になくなってしまったのに。きっと、親や本人がネットで調べて、何とか解決してしまっているのかなと思ったり。

ひろはさん：最近では、子どもたちに一番接しているのはボランティアさんかなと思います。図書館から子どもたちに向けたおはなし会などで学校へ出かけることが少なくなっているのです。その反面、ボランティアさんに向けて講習などでお話しすることが増えています。

そういう時、私などは、これまでの自分の経験の蓄積のようなものから伝えることができますが、これからの若い司書の人たちは、図書館の中でも外でも、子どもたちとの実際の経験を積む場がないまま、伝えなくてはいけないというのが、どうなのかなって思います。

みずもさん：例えばひろはさんの経験とか知識をそのまま、後輩に渡してあげられたらいいけれど、それは自分で獲得しなくちゃ活用出来ないものだから、若い人たちにはその努力をしてほしいですね。今、児童図書館研究会の学習会などをやっても、参加するのはボランティアの方と年配の職員ばかりです。若い人にも積極的に参加してもらいたいですね。(了)